「今日の説教、聴き手のために」　　2014/6/22　　明治学院教会

（講壇-3）　　岩井健作（前牧師）

「目が澄んでいれば」

マタイによる福音書　６章２２節－２３節

「目が澄んでいればあなたの全身は明るい」(22)

１、保育者の養成校で学生に「保育者の目－３っの働き」というお話をした事がある。第一は、客観的な目、全体状況を見る目。観察する目、「３人称の目」である。子育の母親にも必要な目の位置であろう。第二は、「向かい合う目」。子どもへの愛情のまなざしである。子育ては目八分、口二分と言う。「２人称の目」である。第三は、「自分が自分を見つめる目」「反省の目、内省の目」「一人称の目」である。しかし目の働きは時として二つの領域、あるいは３つの領域にまたがっている。

２、さて、マタイ福音書は、「目が澄んでいればあなたの全体は明るい」という。前後に「天に宝を積む」「神と富」があるのでお金にまつわる目移り、貪欲、こだわり、思い煩いをするなという意味になるが、本来はそうではない。山上の説教全体から言えば「神の国と、神の義を求める」(6:33)を意味しているであろう。「神に対する従順さに関しての誠実さと正直さをいみする」（ルツp.517)。「澄んでいる」は旧約では「二心のないこと」「気前のよい」（箴言11:25 ）などと用いられ、新約ではパウロが「物惜しみをしない」と施しに関連して用いている（ロマ12:8）。私は、この語が持っている根本的な意味に注目したいと思う。「根本の意味は『単一』あるいは『全体』である」（釈義事典Ｉp.158 haplous)。つまり、目の働きには様々な面があるが、それが相互にその特徴を活かしながら関係づけられて、全体として、「単一な働き」（全人格的働き）としてまとまってることが大事であるという意味に受け取っている。

３、さて、キリスト者の「目」は如何あるべきか。３人称の目は、「歴史認識」「状況把握」「長い目、広い目」である。歴史の文脈で、物事を見る目である。３人称の目を全く持たなかったら、信仰生活は、とても主観的になって、世の中がどっちへ動こうと、内にこもれるキリスト者になってしまう。社会、世界、隣人のことなど関わりない信仰者とは如何なものか。２人称のめ目は、行動の目である。わたしたちの行動は、誰かに促されて、また、誰かと共に、誰かのために、誰かを覚えて、という事で起こされる。教会が社会的行動を必要とするのは、神の救いは、「共に生きる」という、イエスを遣わして御自身を現されたという福音の根本的構造による。神は行動する神である。「１人称」の目は、神の前に悔い改めをして、懺悔をし、感謝してゆく信仰生活の基本である。この３っの目のありようが、相互に関連し、一つになっている全体を「目がハプルース（澄んでにる）」だと表現しているのがこの箇所である。「だれにでも惜しみなく（ハプルース）・・・お与えになる神に願いなさい。」（ヤコブ1:5)は、神との関わりの身近さを覚えさせる。「惜しみなく自らを与える神」に「澄んだ目」で応答をしてゆきたい。「澄んだ目」は信仰の成熟を表す。